

目的 家庭経営学部会関東地区標準生活費研究会は、1978年4月に基準として標準的労働者世帯の労働力再生産費である標準生活費を算定した。しかし今日、家庭経営学の領域においては、労働者世帯の生活費を「労働力再生産費」として捉えること自体に対する異論がありと同時に、その内容に関する理解も様々であるように思われる。こうした異論および理解の不統一は、家政学領域において「労働力」概念の理論的検討が不十分であるところから生じている。そこで本報告は、「労働力」概念検討のはじめとして、家庭経営学領域を中心に家政学において「労働力」がどのように理解されてきたかを明らかにする。

方法 家庭経営学領域を中心に「労働力」概念の系譜をとり、主要な論者の見解を検討する。

結果 家政学における「労働力」概念の系譜は、おおむね次のように大別できる。オ一は、菟山京氏にその典型をみる労働力=生理的エネルギー論である。菟山氏は、家政学に「労働力」概念を導入した最初の論者であり、氏の労働力論が家政学に与えた影響はさきめて大きい。オニは、家庭経済学を展開した大河内一男氏の労働力=労働力商品論である。氏の「労働力」概念の不明確さと不十分性は、その後の家政学における「労働力」概念の展開をさまたげる要因となっている。オ三は、菟山・大河内氏の概念に対し、家政学者自身による労働力論であるが、論者は少数であり、その内容の理論的展開はさきめて不十分である。以上の家政学における「労働力」概念の展開の不十分性と誤りの指摘の上に、わかれわかれの概念についてほ(その2)で述べる。